

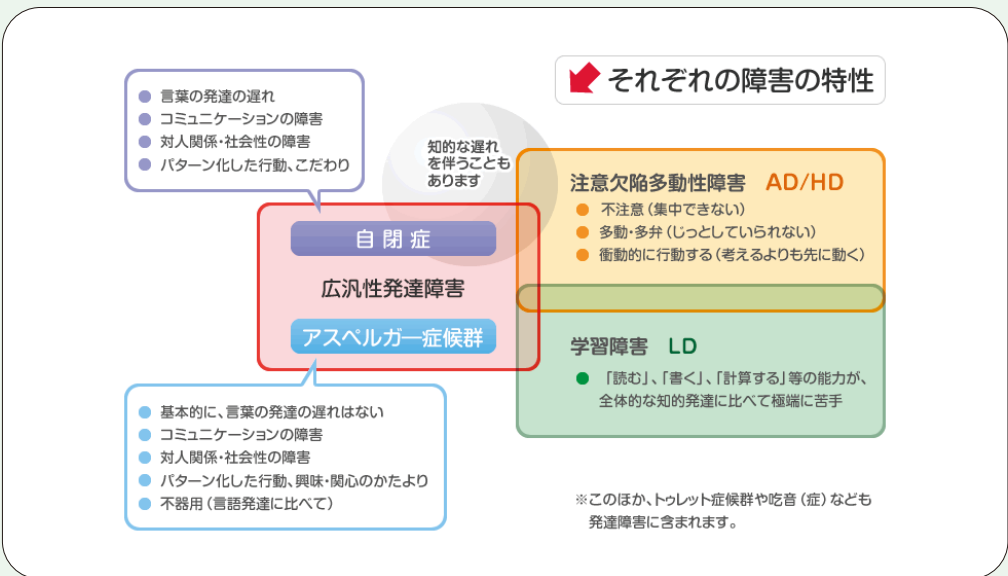
第3節 発達障害、知的障害の人と楽しむ芸術鑑賞会

(1) 発達障害について

○発達障害の定義

発達障害者支援法において、「発達障害」は「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの」と定義されています。

(厚生労働省HPより引用)



○自閉症

自閉症は1943年にレオ・カナリーによって初めて発表されました。

自閉症は「対人関係の障害」「コミュニケーションの障害」「パターン化した興味や活動」の3つの特徴をもつ障害で、生後まもなくから明らかになります。

(厚生労働省HPより引用)

○自閉症スペクトラム

自閉症スペクトラムは1996年にローナ・ウイングによって提唱された概念です。彼女はカナリータイプの自閉症とアスペルガー症候群、その両者の診断基準は厳密には満たさないが周辺に属する群を、ひとつの連続体（スペクトラム）として捉えました。

自閉症スペクトラムには3つの特徴がみられます。

①社会性に関する障害 ②コミュニケーションに関する障害 ③想像力に関する障害

○自閉症スペクトラムと併存しやすい障害

・注意欠陥多動性障害（AD/HD） ・学習障害（LD）

○アスペルガー症候群

アスペルガー症候群は、広い意味での「自閉症」のひとつのタイプです。最初に症例を報告したハンス・アスペルガーというオーストリアの小児科医の名前にちなんでつけられました。アスペルガー症候群は、自閉症の3つの特徴のうち「対人関係の障害」と「パターン化した興味や活動」の2つの特徴を有し、コミュニケーションの目立った障害がないとされている障害です。言葉の発達の遅れがないところが自閉症と違うところです。知的発達に遅れのある人はほとんどいません。

(厚生労働省HPより引用)

○高機能自閉症

高機能自閉症とは、3歳位までに現れ、①他人との社会的関係の形成の困難さ、②言葉の発達の遅れ、③興味や関心が狭く特定のものにこだわることを特徴とする行動の障害である自閉症のうち、知的発達の遅れを伴わないものをいいます。また、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定されます。

(文部科学省HPより引用)

(2) 発達障害の人と楽しむ鑑賞会の概要

NO-MA企画展「ボーダレス・エリア近江八幡芸術祭『ちかくのたび』」を会場に、発達障害の人、また、ともに芸術を楽しみたい人が集う芸術鑑賞会を開催しました。

「発達障害の人と楽しむ芸術鑑賞会」

日時：11月9日(土) 13:30～15:30 会場：NO-MA、寺本邸、まちや倶楽部

参加者：17人（うち当事者3人）

【鑑賞会の内容】

NO-MA学芸員の案内のもと、3会場（NO-MA、寺本邸、まちや倶楽部）を巡り、参加者同士と一緒に鑑賞したり、一人で鑑賞したりしました。その後、自由に感想を言ったり聞いたりする振り返りの時間を設けました。最後にアンケートに答えていただき、鑑賞会を終了しました。

(3) 鑑賞会実施までの流れ

1

部内打ち合わせ①

周囲とのズレに生きづらさを感じている発達障害の人が多くいることから、個々の視点を受け止め／受け止められる場として鑑賞会が機能することも重要と考えました。鑑賞会では、作品鑑賞とNO-MA 学芸員による作品解説に加え、多様な個性を受け止め／受け止められる場として振り返りの時間も設定することにしました。発達障害の人が楽しむことができる鑑賞会にするための工夫や配慮について、次のような意見が挙げられました。

① 視覚的に情報が見えるようにする | ②対話型鑑賞で多様性を体験する | ③様々な視点や考えを聞ける場にする | ④事前に情報を知りたい人もいれば、そのまま体験したい人もいることを想定し、選択肢を複数用意する | ⑤鑑賞会に参加していないけど意見を伝えたい人がいるとの、滋賀県発達障害者支援センターからの過去の情報を基に、その場でなくても答えられるアンケート回答方法を検討する。



2

広 報

鑑賞会の情報をケアサービス推進課が運営している、滋賀県内の福祉の魅力を発信するウェブサイト「SHIGA-FUKU」に掲載。発達障害の人、興味のある人、いっしょに楽しみたい人にも参加していただけるように発信しました。



3

「滋賀県発達障害支援センター」への協力依頼

発達障害の当事者に参加いただけるよう、滋賀県発達障害支援センター協力のもと、対象者は主に知的障害のない発達障害の人を想定し、鑑賞会の情報をお伝えしました。



4

部内打ち合わせ②

振り返りの時間では、参加者の前で感想や意見を口頭で発表することが苦手だと思う人もいることを想定して、感想は一旦色分けした付箋に書いてもらうことにしました。口頭での発表もOKの場合は青色の付箋、文字での発表だけにしたい場合はピンクの付箋、すぐには考えがまとまらず感想が書けない場合は「考え中」と書かれた黄色の付箋を使ってもらうこととし、誰でも安心して振り返り会にも参加できるようにしました。

(4) 鑑賞会の特徴

○わかりやすい作品解説

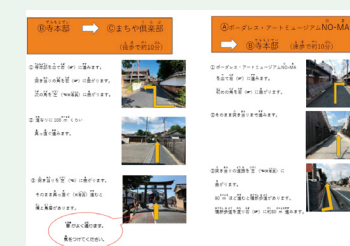
3カ所の会場を巡る鑑賞会では初めに自由に作品鑑賞をし、鑑賞後に学芸員が端的でわかりやすい作品解説をしました。学芸員には、あいまいな表現はできるだけ避け、一文を簡潔にまとめるよう意識してもらいました。

○音声ガイド

鑑賞会を一人でも楽しめるよう希望者には音声ガイド「美保さんガイド」(*)を貸し出しました。* 出展されていた作品に登場するキャラクター「美保さん」をモチーフにした、展覧会オリジナルの音声ガイド

○鑑賞会の行程表

視覚的にわかりやすく、見通しがつきやすい行程表を用意しました。地図を読むのが苦手な人もいため地図ではなく、実際に歩いたときに目に映る風景写真と矢印で会場への行き方を示しました。



行程表

○振り返りの時間

自由に感想を言ったり、様々な視点を聞いたりできるよう振り返りの時間を設けました。意見や考えを否定しない、されないよう、振り返りの時間では3つのルールを設定しました。

①何を言ってもいい ②何も言わなくてもいい ③否定はしない

振り返りの時間では、まず初めに付箋に展示作品や鑑賞会の感想を書いてもらいました。自分の感想を口頭で発表してもいい人は青色の付箋、発表したくない人はピンクの付箋に書き、ホワイトボードに貼ってもらいました。感想がすぐにまとまらない人のために「考え中」と書いた黄色の付箋も用意しましたが、今回の鑑賞会ではみなさん青かピンクの付箋に感想を書かれていました。

○2種類のアンケート方式

アンケートは、鑑賞会後にその場でアンケート用紙に記入してもらう従来の方式のほか、自宅でゆっくり考えて回答したい人、鑑賞会に参加していないけど意見を伝えたい人のためにオンラインアンケートも作成しました。

【鑑賞会終了後】

レポートをNO-MAフェイスブックに掲載。

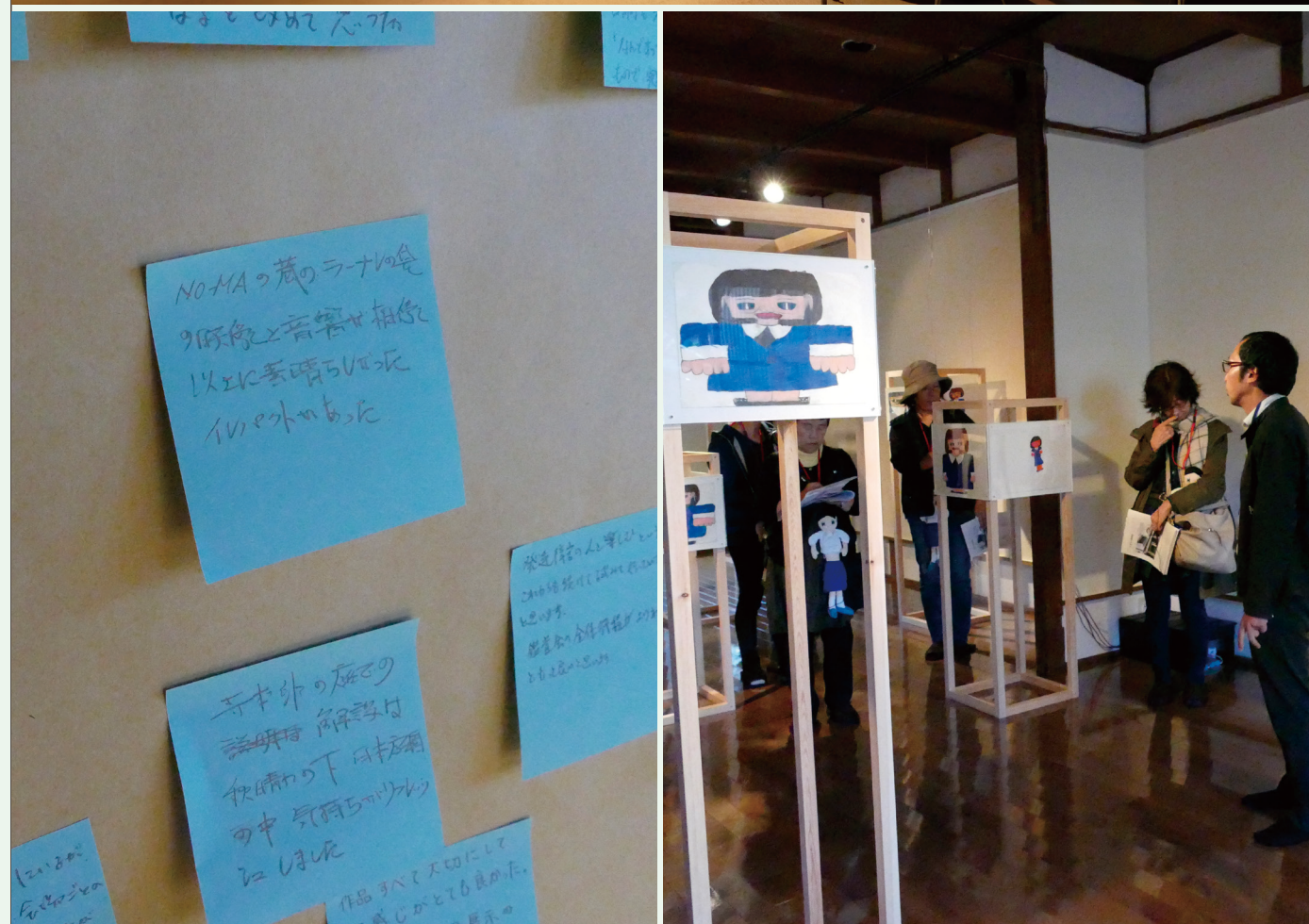
鑑賞会の様子や工夫した特徴などの情報をレポートという形でNO-MAフェイスブックに掲載しました。

(5) 参加者の声

アンケート回答者：

14人（当事者3人、家族3人、その他8人、うちオンラインアンケート回答者1人）

- いろいろな方々が交流して共感できる機会を深めてほしい。小さなお子さんから大人まで発達障害の人、それ以外の人たちと。
- 作品と展示方法のバランスがとても難しいと思いました。大げさすぎても、大切に扱わなくなってもいけないし。でも関係者の方が一生懸命なのは全体でよく伝わりました。これからも長く続けてほしいです。
- 今回、発達障害の方が主な対象の企画でしたが、普段から他の色々支援の必要な方への企画をありがとうございます。これからも少しずつでも続けていただければと思います。
- 今回は当事者の方は少なかったように思うが展示会の内容は良かったです。もっと当事者の方が来られたら面白いと思いました。
- 以前から一度会場に行ってみたいと思っていたので、いろいろな作品も見られて今回もとても良かったです。解説も実際に聞くことができてそういう背景があったのかと印象的でした。
- 「発達障害の方と楽しむ」ということが、どういうことだったのかが、わからなかった。行程表がその配慮だったのかな。
- 本当に楽しかったですし、ありがとうございました。できれば最後の話し合いをもう少し長く時間がほしいですね。ですが、当事者の方へのご配慮は素晴らしいと思いました。
- 今回地図がついていたので寺本邸へスムーズに行けたが、初めて自分一人で行った時はわかりにくかった事と近く住民の方が違う場所に案内してくれたのももう少しわかりやすくしてほしい。それぞれの展示場所は面白く興味が持てる内容であった。工夫も良かった。説明など聞くとまた見てみたいと思いました。
- 作者さんの気持ちや思い、作品に背景があることを知れて良かったです。発達障害の人も気軽に関われる、参加できるのであれば有難いです。



(6) 知的障害の人と楽しむ鑑賞会の概要

ボーダレス・アートミュージアム NO-MAで開催された「第16回滋賀県施設・学校合同企画展」を活用し、野洲養護学校高等部美術部の生徒と信楽学園の園生がそれぞれ集う鑑賞会を開催することで、知的障害の人の様々な場面へのアクセシビリティの向上と合理的配慮の進展につなげることを目的としました。

○野洲養護学校高等部美術部のみなさんと楽しむ芸術鑑賞会

日時：12月25日（水）

参加者：10人（うち当事者6人）

○信楽学園のみなさんと楽しむ芸術鑑賞会

日時：12月26日（木）

参加者：15人（うち当事者11人）

出展作家の紹介テキストの内容をわかりやすくまとめた「やさしい作品ガイド」を配布し、自由に作品鑑賞しました。

鑑賞後、常設ワークショップ体験 「①発泡スチロール球で作品作り」、「②プルタブに色を塗ろう」を行いました。

その後の振り返りの時間では質問カードを箱の中から引いて答えていただきました。

2つの引き出し口を設け、「はい・いいえ」で答えるクローズドクエスチョン、自分で考えて答えるオープンクエスチョンの2種類を用意しました。

最後に「やさしいアンケート」に回答していただきました。



やさしい作品ガイド

(7) 鑑賞会の特徴

○やさしい作品ガイド

出展者の紹介テキストを箇条書きにし、文章も短く編集しました。

フォントは文字の形がわかりやすく、読み間違えにくい「UD フォント」にしました。文字の大きさは見やすいように18P以上にしました。漢字が苦手な人も読めるように文章にはルビを振り、文節をわかりやすくするためにわかち書きにしました。

○アンゲーム（※）方式の振り返りの時間

自由な発言が苦手な人もいと想定して、意見や感想を共有しやすくすることを目的に質問を予め用意しました。質問カードを中身が見えない箱に入れてくじ引きのように引いてもらいました。カードは2種類用意。

①「はい・いいえ」で答えることができるクローズドクエスチョン

② 自分で考えて答えるオープンクエスチョン

質問の中には、作品や鑑賞会に関するものもあれば、お昼に食べたものや普段遊びに行く場所を尋ねる質問もあり、ゲーム感覚で楽しく参加できるように工夫しました。

※順番にカードをめくり、カードに書かれた質問に答えていくというコミュニケーションゲーム

○やさしいアンケート

やさしい作品ガイド同様にアンケートもシンプルな文章、UD フォント、ルビあり、わかち書きで作成しました。

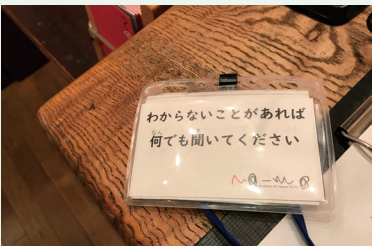
○わからないことは何でも聞ける

信楽学園での鑑賞会では、気軽に何でも聞きやすいようにスタッフは「わからないことがあればなんでも聞いてください」と記載された名札を着用しました。

12月25日に実施した野洲養護学校のみなさんとの鑑賞会のアンケートに、NO-MAが「わからないことがある時に何でも聞ける」美術館だと良いと回答した人が多かったことから生まれたアイデアでした。



質問カード



鑑賞会で使用した名札

(8) 参加者の声（野洲養護学校高等部美術部のみなさんと楽しむ芸術鑑賞会）

アンケート回答者：6人（生徒6人）

【質問】 NO-MA以外の美術館へ行ったことはありますか？

ある：5 | ない：0 | わからない：1

【質問】 NO-MAがどういいう美術館だったらいいなと思いますか？（複数回答可）

展示作品の話が聞ける.....	5
作品作りができる.....	2
作品を見ながら話ができる.....	4
「やさしい作品ガイド」がある	5
さわることができる作品がある.....	2
顔を知っているスタッフがいる.....	1
近くにおいしい食べ物屋さんがある.....	0
疲れたら座って休めるところがある.....	3
わからないことがある時に何でも聞いていい.....	5
美術にくわしくなれるわかりやすい研修会がある.....	2
その他.....	0

- また絵が変わってまた来たいと思います。
- また、色々な作品がみたい。作品作りをまたしてみたい。
- 作品がよかったと思います。
- 作品がきれいですごくあたたかみがありました。場所も落ちつきます。
- 作品がよかったと思います。
- みんなの絵がとてもじょうずにぬっているところを見ました。
いろいろな作品を見て良かったです。



(9) 参加者の声 (信楽学園のみなさんと楽しむ芸術鑑賞会)

アンケート回答者：11人 (園生11人)

【質問】 NO-MA以外の美術館へ行ったことはありますか？

ある：4 | ない：4 | わからない：2 | 無回答：1

【質問】 NO-MAがどうい美術館だったらいなと思ひますか？ (複数回答可)

展示作品の話が聞ける.....	4
作品作りができる.....	2
作品を見ながら話ができる.....	6
「やさしい作品ガイド」がある	2
さわることができる作品がある.....	0
顔を知っているスタッフがいる.....	0
近くにおいしい食べ物屋さんがある.....	0
疲れたら座って休めるところがある.....	4
わからないことがある時に何でも教えてくれる人がいる.....	4
美術にくわしくなれるわかりやすい研修会がある.....	1
その他.....	0

- 色々な作品があったので、出展したいなと思った。
- 色々な人が色んな作品を出していて、見て楽しかった。
- 折り紙が活かせるから。
- みんなの作品が美しく、考える技術がすごいと思いました。
また来れたら来たいです。



(10) 考察

「発達障害の人と楽しむ芸術鑑賞会」では、参加申し込み時に発達障害の有無の申し出は不要としていたので、当日までどのような方々が来られるのかわかりませんでした。当日は3人の当事者が参加してくださいましたが、他の参加者からのアンケートでは、「当事者の方は少なかったように思うのですが展示会の内容は良かったです。もっと当事者の方が来られたらおもしろいと思いました」との意見があり、より多くの当事者が参加することにより、当事者ではない参加者にとってもより興味深い鑑賞会になることが推察されました。また、「振り返りの時間をもっと長くしてほしい」との意見も多数あり、多様な視点を交換したいというニーズがあることも示されました。

今回の鑑賞会では多様な価値観を受け止める／受け止められる場を狙いとしてしました。企画を考えている時期に、ある新聞に掲載された発達障害の方の記事を読みました。そこには大学を卒業後、企業に就職してから周りの人との価値観の違いや周囲との軋轢から生きづらさを感じていることが綴られていました。近年、発達障害についての認知度や理解も進んできましたが、まだまだ周囲の理解が得られない状況から生きづらさを感じている人も少なからずいらっしゃいます。さまざまなモノの見方や感じ方が、よりその体験に豊かさをもたらす芸術鑑賞の場であるからこそ、それぞれの見方、感じ方をより自然に受け止められると考えました。

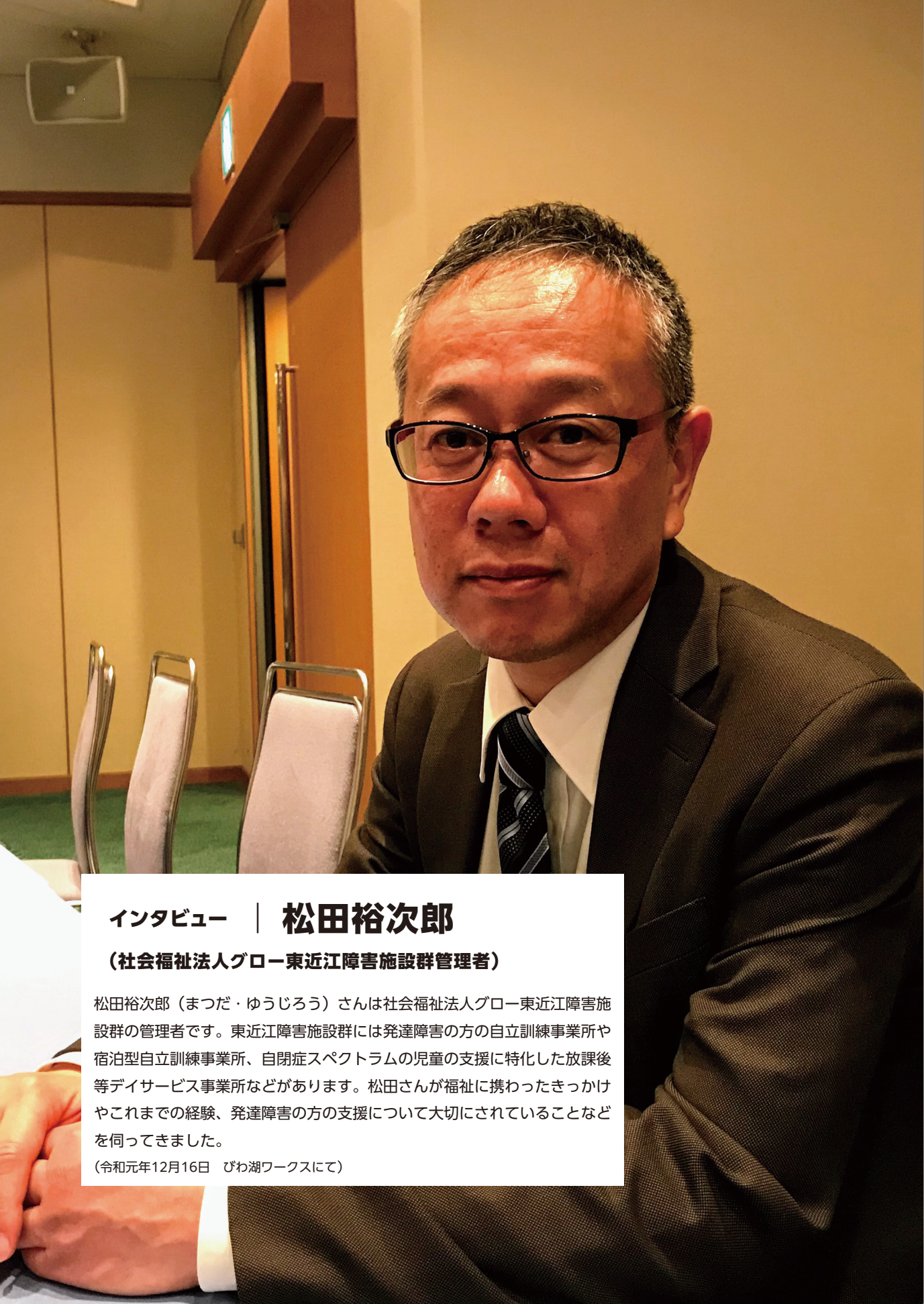
また、野洲養護学校美術部のみなさんとの鑑賞会と信楽学園のみなさんとの鑑賞会では、どちらも参加者の年齢層は共通しており、16歳～18歳の方々と、中には初めて美術館に来たという方もいらっしゃいました。

美術館のイメージとして、「知識がないと楽しめない」、「静かにしないといけない」というイメージも少なからずあるのではないのでしょうか。これまで実施してきた鑑賞会で、障害特性に合わせた伝える方法について検証してきました。今回は簡易な表現やフォントなどにこだわり、よりわかりやすく伝える方法について検討しました。美術についてわからない、でも興味や関心があるという方については、まずは美術の楽しみ方や魅力を知ってもらうことから始め、それをきっかけに新たな経験を積み重ねることで選択肢や視野が広がることにつながると考えます。

また、わかりやすく情報を知ることができ、わからないことがあれば教えてくれる人がいる、障害特性について理解のある人がいる、そういった安心感から出かけてみよう、アクセスしてみようという動機に繋がるのではないかと考えます。

(佐倉)



A portrait of Yuzo Matsuda, a middle-aged man with short grey hair and glasses, wearing a dark suit, white shirt, and patterned tie. He is sitting at a table with white chairs in the background.

インタビュー | 松田裕次郎

(社会福祉法人グロー東近江障害施設群管理者)

松田裕次郎（まつだ・ゆうじろう）さんは社会福祉法人グロー東近江障害施設群の管理者です。東近江障害施設群には発達障害の方の自立訓練事業所や宿泊型自立訓練事業所、自閉症スペクトラムの児童の支援に特化した放課後等デイサービス事業所などがあります。松田さんが福祉に携わったきっかけやこれまでの経験、発達障害の方の支援について大切にされていることなどを伺ってきました。

(令和元年12月16日 びわ湖ワークスにて)

流通業からの転職

実家は愛知県で洋服屋さんをやっていました。静岡県にある20店舗ぐらい展開している洋服屋のチェーン店の社長とうちの親が知り合いだったので、大学卒業後、その店舗で何年か修業をして、ゆくゆくは実家を継ぐのだろうなという感じで働いていました。

そんな中、27歳の時に交通事故に遭って腰椎を骨折しました。約2か月間、寝たきりになりました。入院中に6人部屋のようなところで、斜め向かいのおじいさんが、何かよく分からないけれども、最後に「うわあ」と言って息を引き取ったのを見て、人は生きているのではなく、生かされているなど、人の生死について考えさせられました。そこから、自分にやれることは何かないかなと考え、それがきっかけで福祉に興味を持ちました。

その後、実家がある愛知県の社会福祉法人がたまたま求人募集をしていたので、30歳の頃に転職しました。その法人は宿所提供施設という、救護施設と同じ保護施設も運営していました。当時は全国に3カ所くらいしかない、数少ない施設で、そこでは精神障害や知的障害、身体障害の人がいっしょに生活されていて、かつ複数の事業をやっていて、そういう意味では面白かったです。僕が福祉の面白さを感じ始めたのはそこからです。

発達障害との出会い

洋服屋さんから愛知県の社会福祉法人に入職し、最初の配属先は身体障害者授産施設でした。車いすの人や筋ジストロフィーの人の支援をしていました。しかし、その後、知的障害者授産施設に異動になり初めて自閉症の人と出会いました。その時は、どのように対応したらいいか全く分かりませんでした。

当時は、アメリカのノースカロライナ州立大学で実践されていた「TEACCH」という自閉症の人の支援プログラムが日本でも広がり始めた時代でした。

勉強のためにそういう研修会へ行くと、写真カードや絵カードをスライドでいっぱい見せてくれて「こういうふうにはやったら落ち着きます」と……。そうすると、僕は写真や絵を見せたらいいのかと思います。だけど、ただ見るだけではうまくいくわけがない。自閉症の人がただ絵カードを見せられたところで、何の意味も分からない。意味付けがあって初めてスケジュールを理解したり、コミュニケーションのツールになったりするわけだから、それが分からないまま、ああいう研修会で「こういう写真カードでやると、みんな、落ち着くんです」と言われても、うまくいきませんでした。

でも、何でできないのだろうか？ どうしたらこのカードの意味付けを分かってもらえるのか？そういうことを考えて一生懸命やっていた時期でした。そこを諦めなかったから、今があるのかもしれないです。

その後、滋賀県社会福祉事業団（※1）へ転職し、配属された企画事業部では当時「地域生活体験モデル事業」（※2）をやっており、その後2005年から「体験型グループホーム事業」（※3）が始まりました。まだグループホームの体験利用は制度になっていなかったもので、3ヶ月間だけ支給決定をしてもらって、グループホームでの生活を体験してもらうことを始めたのです。それから派生して、高機能自閉症のグループホーム「ホームかなざわ」（※2017年度末に事業終了）ができました。その頃から発達障害や自閉症の人たちと再び関わるようになりました。

そこでも、やはり支援は大変でした。いわゆる知的障害のある発達障害、自閉症の人たちも多かったけれども、知的障害のない発達障害の人たちは、またちょっと違い、一筋縄ではいきませんでした。構造化をして、環境を整えて「どうぞ」とやったら上手くいくという話では全然なくて……。どう向き合ったらいいのかというのを本当に悩みながらやっていたかなと思います。知的障害のない発達障害の方については、勉強ができたり、秀でた能力を持っていたりすると親や周囲の人は障害に気づきにくく、適切な理解やサポートが得られず、周囲からはわがままな子、情緒不安定な子といった捉え方をされていました。そして、だんだんと自己肯定感が低くなってきたり、強い不安感が生まれたりします。そういう生活歴がずっと重なってきて、成人期に抑うつや、強迫性障害などの何か違う名前の障害が二次障害として現れ、そこで初めて「発達障害」と周囲が気づくケースも少なくありませんでした。だから、障害特性だけにアプローチしていても、うまくいかないことの方が多い気がするのですよ。仕組みだけの支援はうまくいかないの、個別対応になります。しかし、それが結局、人対人の自分しかできないような職人技になってしまっていて、それが良くないなと思いながらもどうしてもそこから抜け出せない感じでした。自分だけしかできないような支援をやっている、自分がいなくなった瞬間にうまくいなくなるだろうなと思います。「人」に依存するのではなくて「プログラム」に依存する。環境を整えるのは支援者がやるのだけれども、こういうプログラムを提供したら、本人はそのことを学んで生きやすくなるとか、そういう仕組みがあれば人に依存する支援にはならないかなと思いました。

(※1) 社会福祉法人グローの前身。2014年に社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団と社会福祉法人オープンスペースれがーとがひとつになり、現在の社会福祉法人グローとなった。

(※2) 自宅で暮らす障害のある方が、グループホームでの暮らしの体験や、自立生活にチャレンジする機会の提供を目的として実施された事業（2001年～2004年）

(※3) 親から離れて暮らすことに踏み出しづらい方などを対象として、地域生活の体験を目的にグループホームで3か月間の体験入居や4泊5日の体験宿泊を提供する事業（2005年～2007年）

支援で大切にしていること

「じょいなす」（放課後等デイサービス事業所）は立ち上げの頃、あらゆる障害の人を受け入れるというコンセプトで始まったので、室内は広いワンフロアで様々な障害の子供を受け入れていました。しかし、幅広く受け入れている反面、中には毎日のようにパニックになっている自閉症の利用者がいました。窓から飛びだそうとしたり……。防犯用窓ロックとか付けているけど、そういう問題ではなくて、落ち着いて過ごしてもらうにはどうしたらいいか、というのを考えました。自閉症の人に合わせた環境を整えるしかないということです。「じょいなす」はただ預かるということではなくて、一人一人が安心して落ち着ける場があり、社会に出たときに生きやすいように子供の頃からしっかりと支援をすることをコンセプトに再編成しました。子供の頃から、適切な支援や何か手だてがあったら、二次障害でここまで、困ったり、苦しむことにはならなかったのではないかなという人たちとこれまで出会ってきましたので、少しでもそういう現状を減らしたいと思いました。きっと年齢を重ねて「じょいなす」を退所した後だってなんらかの形で困るんですよ。だけでも、



「じょいなす」の一室

その困る人たちが困らなくても済むような手だてを、何となく自分で考えられたり、こういうことしたらうまくいくかな？みたいなことを自分で考えられたらいいなと思います。この辺はちょっと高機能発達障害の方になりますが、知的障害がある発達障害の子供たちでも、自分で選択する、交渉する、ということをやれるというのがすごく大事だろうと思っています。一部ではありますが、支援者の中には、自分の言うことを聞かせるために利用者をコントロールしようとする人もいます。そうではなくて、お互いがある程度、妥協するというか。ここまでは許すから、あなたもここまでは許してよ、みたいな。障害があっても無くても人間関係はそういう中で成立している気がします。だけど、「支援者」と「利用者」という関係性になった瞬間に、そういうことではないよねと思う支援者は多いのではないかなと思います。「こうあるべきだ！」とか、「清く正しく生きなさ

い！」、「男女交際！？何言ってるんですか？」とか……。支援者が思い通りにコントロールしようとするのではなくて、「ここまではいいけど、ここから先は超えたらまずいよね」とか、そういうことだと思います。対人関係は交渉の連続で成立していると思います。それは障害があってもなくても同じで。だから支援者の対応次第で利用者の生きづらさは変わるのだろうなと思っています。



松田裕次郎（まつだ・ゆうじろう）

社会福祉法人グロー 東近江障害施設群 管理者（兼）所長（兼）室長
交通事故がきっかけで社会福祉法人愛恵協会に入職。その後、滋賀県社会福祉事業団に転職。
平成17年より、発達障害者の生活支援事業を担当し、平成26年には、発達障害者の日中と生活の支援を一体的におこなうジョブカレの事業を担当。